

内田樹著「幕末近代人の胆力 - 命がけの反骨に驚き - 」日本経済新聞 2009年10月25日朝刊を読む

幕末近代人の胆力 - 命がけの反骨に驚き

1. (1) 幕末の人々の書きものを読んでいて、いちばん彼我の隔絶を覚えるのは、胆力の違いである。
(2) 福沢諭吉はその思想においてはすぐれて近代人であるが、『福翁自伝』(岩波文庫)を読むとその「野蛮人」ぶりに驚かされる。
2. (1) 少年の日に「神罰^{みょうばつ} 冥罰^{めいばつ}なんということは大嘘^{だいうそ}だと独り自ら信じ切って」、叔父が信心している稲荷神社に入り込み、ご神体の石を棄^すてて、代わりの石を置いて、祭りの日に人々が太鼓を叩き、お神酒を酌み交わしているのを見て「馬鹿め」と笑う。
(2) 「子供ながらも精神は誠にカラリとしたものでした」と本人は涼しい顔をしている。
3. (1) 長じて大阪の適塾に学んだときも先行きのあてもなく、寝食を忘れて学問をする。
(2) 「粗衣粗食、一見見る影もない貧書生でありながら、智力思想の活発高尚なることは王侯貴人も眼下に見下すという気位」を持している。
4. (1) 適塾の書生たちは「目的なしに苦学した」と福沢は書いている。
(2) 「その目的のなかったのが却^{かえ}って仕合^{しあわせ}」だった。
(3) (ア) 「今日の書生にしても余り学問を勉強すると同時に始終我身の行く先ばかり考えているようでは、修業は出来なからうと思う。」
(イ) 「如何^{どう}したらば立身が出来るだろうか、如何^{どう}したらば金が手に這入^{はい}るだろうか、立派な家に住むことが出来るだろうか。」
(ウ).....というようなことばかりに心引かれているとろくな学問はできない。
(4) そう言い放った人物が日本の私学教育の基礎を築いた当の人であったという事実をわが国の教育関係者は思い出した方がいい。
5. (1) 幕臣になった後も福沢の野蛮人ぶりはおさまらない。
(2) 鳥羽伏見の戦いに敗れて、徳川慶喜が江戸城に戻ってくると幕臣たちは奇策妙案を献じ、悲憤^{こうがい} 慨^{がい}する。福沢はそれをせせら笑って、戦争になりそうだったら教えてくれと頼む。
(3) 君らは好きに戦争でもするがよい。

(4)「僕は命がけた。(中略)僕は始まると即刻逃げて行くのだから」と言う。

(5)だが、ほんとうにいくさが始まり、「八百八町は真の闇、何が何やらわからないほどの混乱」のさなかになると、上野の戦場と塾は二里離れているから鉄砲玉の飛来するおそれはあるまいと、塾ではふだん通りに英語の本で経済学の講義をしている。

6.(1)福沢という人は、人が右と言えば左と言い、上だと言えば下だと混ぜっ返す天性の天の邪鬼^{あまじやく}である。だが、その反骨はただのシニスムではない。

(2)肚^{はら}に一剣を呑み込んだ「命がけ」の反骨である。胆力が違うというのはそのことである。

[コメント]

「福翁自伝」を読み、人生にターボエンジンをつけてもらった人は多い。文字通り「一所懸命」に生き抜いて、日本や世界に多くのものを遺された。「福翁自伝」の紹介として今まで接したもので最も面白いのがこの内田先生のもの。是非、御一読を。

- 2009年10月25日 林明夫記 -